

平安時代の文学作品における形容動詞対照語彙データベースの構築とそれを用いた語彙論的研究

村田 菜穂子 岩田 俊彦

大阪国際女子短期大学

日本語の語彙研究及び語彙史研究分野の中で、遅れている形容動詞の研究を進展させるために、まず第一段階として「平安時代の文学作品における日本語形容動詞対照語彙表データベース」の作成を進め、それを基礎資料として、語彙量の点から、平安時代を代表する、語構成の異なる二つの形容動詞（「ゲナリ型形容動詞」と「カナリ型形容動詞」）について比較・対照を行った。その結果、二つの形容動詞の語彙量と作品の成立年代とは密接な関わりをもち、さらには、両者の作品への受け継がれ方には差違があるという実態が明らかになった。

The Construction of a Contrastive Database of Adjectival Verbs in the Literary Works of the Heian Period and a Lexical Study Using the Database

Osaka International College for Women
Nahoko MURATA Toshihiko IWATA

The purpose of this research is (1) to construct a contrastive database of the adjectival verbs used in the literary works of the Heian Period; and (2) to carry out a statistical study of two types of adjectival verbs (*genari*-type and *kanari*-type), which have a different lexical structure. The result we obtained was twofold: (1) the frequency and range of these two types are closely related with the years when the works were written; (2) these two types show different patterns of distribution and transmission in the works.

Keywords

adjectival verbs in the Heian Period contrastive lexical database lexical structure numerical aspect of
lexical distribution word formation suffix

1 研究の背景

日本語の語彙研究・語彙の歴史的研究を推し進めていく上で、日本語の語彙の全貌が通時的に把握できる資料の必要性は極めて高く、宮島達夫編の『古典対照語彙表』（書籍・フロッピー版）^{注1}が語彙研究における基礎資料としてもたらしたの意義は非常に大きいものであるが、この資料で取り上げられた作品は平安・鎌倉時代の散文・韻文作品を合せた14作品という規模にとどまっている。語彙の量の膨大さを鑑みれば、統一した基準ですべての品詞に互る語彙表作成の難しさは想像に難くない。

他方、「より多くの作品を揃えたもの」「品詞毎に一覧してみるもの」ができるものというコンセプトから、平安・鎌倉時代の35文学作品に現れた形容詞にしぼって作成された語彙表（書籍のみ）が安部・片岡・松浦氏によって作成されている^{注2}。形容詞という1品詞に限定されたものではあるが、作品数の多さという点で体系的に語彙の歴史的研究を推し進めていく上ではこのような語彙表の資

料的価値は十分に認められるべきものである。

そこで今回、こうした形容詞の語彙表が刊行されていることを踏まえ、形容動詞の語彙表の作成を始めることにした。形容動詞を選択した理由は、(1) 語彙研究及び語彙史研究分野の中で形容動詞の研究が遅れていること、(2) 広義には形容詞と形容動詞が同じ意義範疇に属する語彙であり両者の関連性は深く、上記の形容詞語彙表と併用した利用の有効性に期待が持てることに拠っている。

2 研究の目的

日本語の語彙研究及び語彙史研究分野の中で、遅れている形容動詞の研究を進展させるために「日本語形容動詞対照語彙表データベース」(第一期として平安時代文学作品)を完成させることが一つの目的であるが、基本的には、それを基礎資料として、形容動詞の体系的問題や個別の問題などの語彙論的研究を進めることが主目的である。さらには、上記の研究成果である用語使用状況から、古典文学作品の分析的研究などに活用する一方で、次期に進めようとする「副詞」データベース作成方法の改良にも活かしたいと考えている。

3 調査対象

具体的に対象とした平安時代の文学作品は次の 22 散文作品で、次の索引を使用した。

『竹取物語総索引』山田忠雄編 武蔵野書院

『土佐日記』★

『伊勢物語』▼

『平中物語』▼

『大和物語』▼

『多武峯少将物語本文及び総索引』小久保崇明編 笠間書院

『篁物語校本及び総索引』小久保崇明編 笠間書院

『宇津保物語本文と索引』宇津保物語研究会編 笠間書院

『蜻蛉日記』★

『落窪物語総索引』松尾聡・江口正弘編 明治書院

『和泉式部日記』★

『枕草子総索引』松村博司監修 右文書院

『源氏物語大成』池田亀鑑著 中央公論社

『紫式部日記』★

『堤中納言物語総索引』森口年光著 勉誠社

『夜の寝覚総索引』阪倉篤義・高村元継・志水富夫編 明治書院

『浜松中納言物語総索引』池田利夫編 武蔵野書院

『更級日記』★

『狭衣物語語彙索引』塚原鉄雄・秋本守英・神尾暢子編 笠間書院

『大鏡の研究 上 本文篇』秋葉安太郎著

『校本讃岐曲日記』今小路覚端・三谷幸子編著 初音書房

『とりかへばや物語総索引』鈴木弘道編 笠間書院

なお、★印を付けた作品は西端幸雄・木村雅則・志甫由紀恵共編『平安日記文学総合索引』(フロッピー版)を使用し、また、▼印を付けた作品は西端幸雄・木村雅則共編『歌物語総合索引』(フロ

ッピー版)を使用した。

4 語彙の計量に際しての基本的な考え方と言語処理の方法

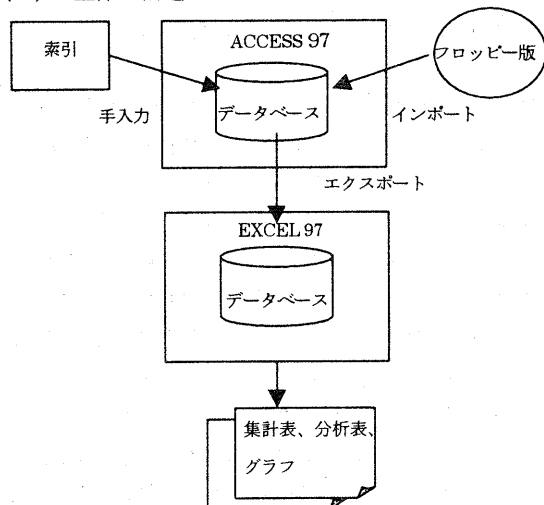
言語記号、すなわち単語の識別の拠り所としては、「意味」「語形」が考えられる。しかし、厳密に言えば、「意味」は発話行為において1回きりの現象であるから、記号識別の拠り所とすることは難しく、音節の数の少ない日本語において同音異義語の問題をひとまず措けば、仮名文字表記を基本としている平安文学作品では、単語の識別は「語形」に拠るのが基本となろう。現代日本語のように、漢字かな交じり文では、漢字すなわち「文字」が記号識別の補助的な役割を担うことにつながる可能性を多分に有しているが、平安文学作品ではそれを期待することはまず困難である。

さて、語彙研究において、語彙の計量の最も基本となる指標は、「異なり語数」と「延べ語数」である^{注3}。

本稿においては、形容動詞だけに着目しているから、各作品で使用されたすべての形容動詞の数(濃度)が延べ語数である。作品中の形容動詞は、未然、連用、終止、連体、已然、命令のいずれかの活用形をとる。たとえば、「あきらか」という語幹の形容動詞は「あきらかなら」「あきらかに/なり」「あきらかなり」「あきらかなる」「あきらかなれ」と変化する。これらを同値類と呼び「あきらかなり」という「見出し語」をつける。同値類の濃度を使用度数といい、延べ語数に対する使用度数の比率を使用率という。また、互いに異なる見出し語の数を異なり語数という。例えば、「あきらかなり」という見出し語は枕草子では1回、源氏物語では15回、「ほのかなり」は枕草子で4回、源氏物語で138回使われている。仮にこの2作品で他の形容動詞が使われていなかったとすれば、枕草子と源氏物語の異なり語数はともに2、延べ語数は5と153ということになる。

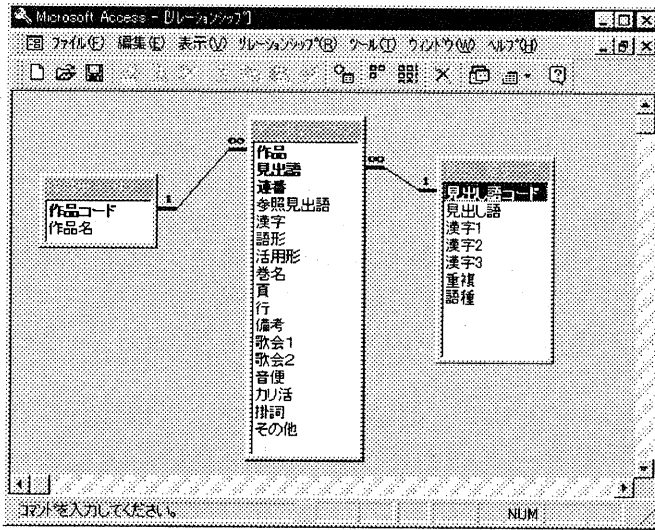
5 データベース化

(1) 全体の構造



データベースは左の図に示したように、ACCESS 97(以下 ACCESS)と EXCEL 97(以下 EXCEL)で構成されている。ACCESS は主として基本となる語彙データの管理、即ち、データの作成、追加、更新、削除およびデータの分類、重複チェック、不一致チェックなどのチェック機能を持ち、EXCEL は主としてクロス集計分析、統計処理、グラフ作成機能を持つ。

(2) データベースのデザイン



ACCESS データベースは、①作品テーブル②見出し語テーブル③データテーブルの三つのテーブルからなる。左図はテーブル間のリレーションシップを示したものである。

データベース化においてその扱いに問題があったのは「漢字」である。「漢字」は、同一の見出し語と判断される場合にも、索引の編者によってその表記が異なるものが多数存在する。しかし、索引に記載された「漢字」は、あくまで各索引の編者によ

って施された「語の意味を把握する」ための記号の付与にすぎず、具体的な言語行為の場合、すなわち作品に現れた語は、種類の文脈的意味を展開することを受け、同一の見出し語に対しても作品毎に異なる漢字が与えられるという結果を招いている。よって、同一見出し語に対して与えられた「漢字」はひとまずすべて「・」で区切って見出し語テーブルの「漢字1」に入力することにした。但し、「かれがれなり」の「枯枯」と「離離」のように明らかに同音異義語と考えられる語については、見出し語テーブルの漢字2「枯枯」を漢字3に「離離」を入力しておき、データテーブルの「漢字」で2または3を指定することによって使い分けることにした。

6 データベースを利用した語彙研究 — 「ゲナリ型形容動詞とカナリ型形容動詞」 —

(1) 概要

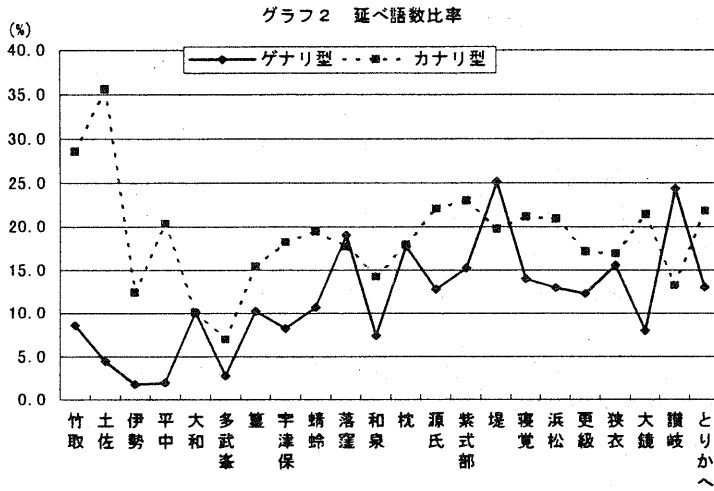
語彙データベースを用いて、語彙量の点から「ゲナリ型形容動詞」と「カナリ型形容動詞」を比較・対象して、それぞれが出現する作品や用語の使用状況などについて考察し、中古形容動詞の造語乃至は語使用の一側面を探る。

「はるかなり」や「あきらかなり」のような語末に「~カナリ」という音形態持つ形容動詞を「カナリ型形容動詞」と呼び、一方、「たのもしげなり」や「をかしげなり」のような語末に「~ゲナリ」という音形態をもつ形容動詞を「ゲナリ型形容動詞」と呼ぶ。とりわけ「ゲナリ型形容動詞」は、平安散文作品においてはその数が多く、群を抜いた生産力を発揮する。また、「カナリ型形容動詞」の方は、「ゲナリ型」には及ばぬものの、バラツキなく安定した生産力を保持し、「~ヤカ」「~ラカ」を含めた「カナリ型形容動詞」の数は「ゲナリ型形容動詞」に次ぐものである。「ゲナリ型」と「カナリ型」の大きな差は、前者が和歌や訓点資料には見出しにくいもっぱら散文に出現する語彙であり、しかも「一回性」が強い。それに対して、後者は、文体を選ばず、広く安定した出現状況のもとに、継承性のある語彙ということが言える。また、「カナリ型」のうち、「肥大化した接尾辞」~ヤカ・~ラカを語幹にもつ形容動詞と「ゲナリ型形容動詞」の生産力が高まる時期が時を同じくするという点も極めて興味深い事柄である。

(2) 分析

I 総形容動詞に対する「ゲナリ型」と「カナリ型」

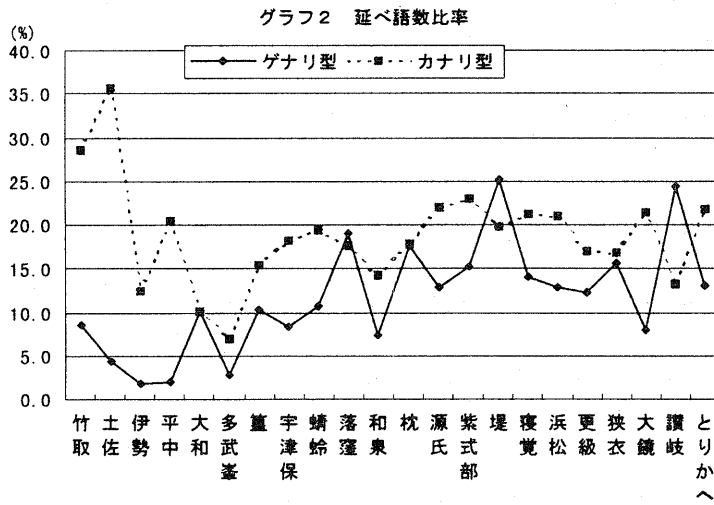
①各型の作品別の割合（異なり語数における比率）



グラフ1 ⇨⇨22 作品全体では、「ゲナリ型」が 32.9 パーセント、「カナリ型」が 13.7 パーセントで、「カナリ型」に比して「ゲナリ型」の異なり語数の多さがひときわ目を引く。もっとも、『葦物語』（900 年代半ば）以前の作品では、「カナリ型」は「ゲナリ型」を大幅に上回っているが、『宇津保物語』を境に、「ゲナリ型」と「カナリ型」の語彙量がそれ以前とは異なる様

相を見せ変化する。

②各型の作品別の使用率（延べ語数における比率）



グラフ2 ⇨⇨延べ語数の場合にも、900 年代半ば以前の作品では、大方の作品で「カナリ型」が「ゲナリ型」を上回っている。それ以降の作品でも、「ゲナリ型」が「カナリ型」を上回るものは、『落窪物語』『中納言物語』『讃岐典侍日記』の 3 作品しかなく、全体的傾向として、「カナリ型」が優勢で、どの作品においても「カナリ型」が安定した使用率を保っている。

II 出現作品数から見た「ゲナリ型」と「カナリ型」

①作品別に見た異なり語数における割合 ⇨⇨表 1

		1 作品のみ	5 作品以上
ゲナリ型形容動詞	語数	225	53
	比率 (%)	57.7	13.6
カナリ型形容動詞	語数	49	69
	比率 (%)	32.0	45.0

1 作品にしか出現しない語は圧倒的に「ゲナリ型」に多く（半数を超える）、反対に、「カナリ型」は複数の作品にまたがって出現する（5作品以上；約45パーセント）語がかなり存在する。

Ⅲ「ゲナリ型」の語構成とその割合（異なり語数）

「ゲナリ型形容動詞」の語基

<1> 活用形容詞語幹：192語（47.7パーセント）

例 なめ（無礼）・ねた（妬）・かしこ（賢）・はかな・たえがた（耐難）など

<2> シク活用形容詞語幹：127語（32.6パーセント）

例 をかし・くるし（苦）・たのもし（頼）・おそろし（恐）・さうざうし（騒）など

<3> 形容動詞語幹：7語（1.8パーセント）

例 あはれ（哀）・はるか（遙）・あたたか（暖）・ものあわれ（哀）など

<4> 動詞連用形：24語（6.2パーセント）

例 しり（知）・おはし（在）・おもひ（思）・はなち（放）・たちより（立寄）・など

<5> 助動詞連語：39語（10.0パーセント）

例 いだかまほし（抱）・あるまじ（有）など

<6> 名詞：7語（1.8パーセント）

例 あるじ（主）・にくさ（憎）・わらは（童）・おほやう（大様）など

～ゲナリに上接する要素を、品詞という観点から見ると形容詞が79.2パーセントと圧倒的に多く、それ以外の語はわずかながらに造語を行っているにすぎない。

Ⅳ「カナリ型」の語構成とその割合

①「カナリ型形容動詞」を構成する接尾辞

[a]

i [～]+カ

コマカ（細）・シズカ（静）・ニハカ（俄）・ユタカ（豊）・ワヅカ（僅）など

ii [～ヤ]+カ

タカヤカ（高）・タヲヤカ（嫺）・ナゴヤカ（和）・ワカヤカ（若）など

iii [～ラ]+カ

キヨラカ（清）・ナダラカ・メヅラカ（珍）・ヤスラカ（安）など

[b]

iv [～]+ヤカ

コマヤカ（細）・チカヤカ（近）・ハナヤカ（華）・マメヤカ（実）など

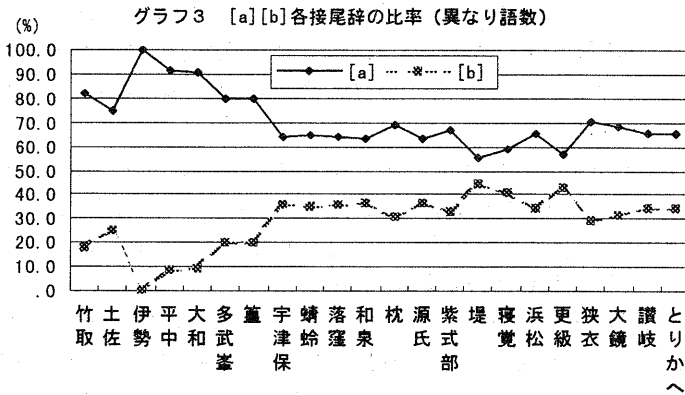
v [～]+ラカ

オイラカ・ノビラカ（伸）・ワカラカ（若）

vi [～]+ソカ・[～]+ビカ・[～]+ヨカ

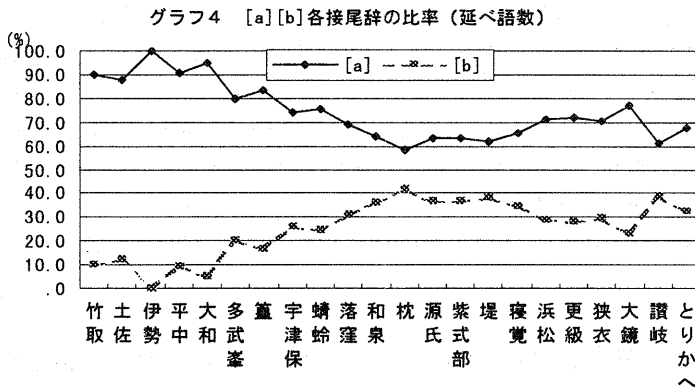
オロソカ（疎）・ユホビカ・ナヨヨカ・フクヨカ

②作品別に見た各接尾辞の割合（異なり語数）



1) で認められた変化の境目と共通性が指摘できる。

③作品別に見た各接尾辞の使用率（延べ語数）



グラフ3⇒古い作品ほど [a] の割合は高く、逆に、[b] の割合は低い。また、平安中期から後期に向かって、[a] の割合は減少し、[b] の割合は増加してくるようになるが、『宇津保物語』を境に、[a] の割合にも [b] の割合にも大きな変化は見られなくなり、一定してくる。異なり語数から見た「ゲナリ型」(グラフ

グラフ4⇒延べ語数の場合も、古い作品ほど [a] の割合は高く、逆に、[b] の割合は低い。また、平安中期から後期に向かって、[b] の使用率は徐々に増加し、[a] の使用率は徐々に減少してくるようになり、『枕草子』を境に、[a] と [b] のそれはほぼ横ばい推移し、一定の様相を呈するようになる。

(3) まとめ

こうして見てくると、作品に出現するそれぞれの形容動詞の語彙量（異なり数・延べ語数）と作品の成立年代とは密接な関わりがあるという実態がうかがえる。さらに、語構成を分析して語彙の量的構成を考察する、すなわち、「語彙の造語法を分析する」ことによって、以下に述べるような点が明らかにし得たかと思われる。

900年代半ば以降の作品において、「カナリ型」全体としては、その比率に大きな変動は見られず安定しているが、「カナリ型」内部では、[b] の「カナリ型」がその生産力を伸ばす一方で、代って [a] の「カナリ型」が減少してくるといふ交替現象が展開されている。

さらに、特筆しておきたい点は、「ゲナリ型」と [b] の「カナリ型」の作品への出現状況に共通性が認められる点である。こうした様相をもたらした背景には、それぞれの型を構成する造語法の違

いが考えられる。すなわち、[a]の「カナリ型」には同じ語基をもつ「~カニ」という形態の情態副詞（「カニ型情態副詞」）と対応をもつものが数多く含まれており、元来「カナリ型形容動詞」は、「カニ型情態副詞」から分出された語と捉えることができる。そして、「カニ型情態副詞」はすでに奈良時代から存在する語彙であり、語構成論的な観点から言えば、「カナリ型形容動詞」は平安時代において全く新しい造語法によって形成された語彙ではなく、前時代より継承された構成法によって展開、さらに造語が行われた、歴史性のある語彙ということになる。

一方これに対して、「ゲナリ型」及び[b]の「カナリ型」は、共に平安時代に入ってから生産力を発揮するようになった接尾辞によって形成された語彙であるという共通項をもつ。こうした造語法の新旧が作品の成立年代、すなわち作品の新旧と深く関わり合う、というよりもそれが顕著に反映されていると判断し得る事例として今回の語彙研究を位置づけたいと考えている。

以上、「平安時代の文学作品における形容動詞対照語彙データベース」による語彙研究の一つの研究報告とするが、最後に（紙数の関係で、要点のみを述べると）、先学の研究成果^{注4}及び今回の研究成果を見据えた時、平安時代という一共同態はさらに、900年代半ば以前とそれ以降との間に一つの節目を考えることが可能であり、900年代半ば以前を仮に「平安第一期」、また、それ以降を仮に「平安第二期」と捉えることを支持したい旨を付け加えておく。

本研究の初期段階においては、データ量も少なかったため片手間にEXCELで集計分析する程度であったが、データ量の増加に伴い崩壊的にACCESSデータベースへ移行した。「平安時代」を終えた段階で「漢字」の扱いなど問題を残したままのものや、その他の項目の正規化についても十分検討し尽くしていないという課題を残している。一方、新たな分析のために追加すべき項目（例えば、ジャンル、時代など）がある。これらを作品テーブルの属性として追加すれば、各データに反映させることができる。このような状況と今後のデータ量の増加を考えたとき、早期にACCESS化に踏み切って間違いなかったと判断しているが、現段階においては「ACCESSデータベース」はまだ発展途上であり、将来、「形容動詞対照語彙データベース」として公開するまでには最適な構造に仕上げたいと考えている。

本発表は、文部省平成11年度科学研究費（奨励研究A・課題番号11710228）による研究成果の一部である。

^{注1} 宮島達夫氏『古典対照語彙表』（1971・9、笠間書院、フロッピー版は1989・9）

^{注2} 松浦照子・片岡信二・安部清哉氏「平安文学における形容詞対照語彙表」（『フェリス女学院大学文学部紀要』26、1991・3）・安部清哉・ゼミ学生編「軍記物語五作品の形容詞対照語彙表（稿）」（『玉藻』29、1993・6）・安部清哉氏「八代集における形容詞対照語彙表」（『玉藻』31、1996・3）

^{注3} 水谷静夫氏『朝倉日本語講座2語彙』（1983・4、朝倉書店）

^{注4} 安部清哉氏「語彙・語法史から見る資料—『篁物語』の成立時期をめぐりて—」（『国語学』184、1996・3）、金水敏氏「上代・中古のキルとヲルー状態化形式の推移—」（『国語学』134、1993・9）

（参考文献）

- 1 田中章夫氏『国語語彙論』（1978・2 明治書院）
- 2 蜂矢真郷氏「カ型語幹の構成」（『国語語彙史の研究』17、1998・1 和泉書院）・「ヤカ型語幹とラカ型語幹」（佐藤喜代治編『国語論究7 中古の研究』1998・12 明治書院）・「ラカ型語幹の構成」（『森重先生喜寿記念ことばとことのは』1999・3 和泉書院）